

# こだま

7号

日本基督教団 若松教会

〒808-0053

北九州市若松区修多羅1-8-1

TEL: 093-771-4329

## クリスマスメッセージ

若松教会牧師 茶屋明郎

### 「クリスマスの出来事」

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。

それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理に満ちていた。

(ヨハネによる福音書1章14節)

最近、巷では、クリスマスをお祝いする気運が下火になって、以前みたいな関心や思いが薄れて、人々の気持ちはハロウィンなどの他のお祝いごとに移っているようです。

それを聞いて、さもありなん、当然だ、ありうることだと思います。なぜなら、世の多くの人たちがクリスマスの出来事を、救い主イエスの誕生であると真に正しく理解せずに、真の豊かな恵みと真の大きな喜びを感じることなく祝っていたと思うからです。



ヨセフの許嫁であったマリアが宿し、薄汚い貧しさそのものである飼葉おけを寝床として生まれ、十字架の道を歩み、そして死んで、三日目に復活したイエスは、神から遣わされた救い主であることが、真実なこととして明らかになり、そのことによって、大いなる畏れと驚き、そして喜びが生まれ、お祝いすることになったのが、クリスマスであります。

ヨハネは、イエスを救い主として理解し、見、信じて、大いなる畏れと驚き、そして喜びを経験したことを、「言は肉となり、わたしたちの間に宿られた」という言葉で、クリスマスメッセージとして表現しています。

このメッセージに込められていることの一つは、神はどこかはるか遠くにいて、人間と直接な関わりがない存在ではなくて、イエスを通して、言である神が、肉なる人間となるということによって、神がわたしたちのすべての人の近くに来られ、共におられ、誰も独りぼっちだと嘆かないようにし、愛と慈しみでわたしたちを顧み、支え、慰め、導いてくださっている恵みと真理である、大いなる存在なる神の栄光が、示されていることです。

イエスが神の栄光であり、恵みと真理とに満ち、心豊かなふるまいや、言葉や、行いが、神の思いや心を真に表しておられる聖なる存在であり、神がどんな方であるかを正しく教えている大いなる存在であることを理解し、見、信ずることによって、畏れと驚き、そして喜びに満たされたということなのです。

このメッセージは、「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです。」というパウロの言葉で示されているように、イエスを通して、皆が神の子としての恵みを受け、見違えるように新しくされ、赦しにおいても愛においても、貧しい者が豊かにされ、人を赦し、愛することができるようになったという畏れと驚き、そして喜びの証しが示されています。

また、イエスを通して、不平や不満が心を占め、嘆いてばかりいる者が、生まれ変わり、さまざまな苦難や苦しみをそのまま受け止め、受け入れることができる円熟さを身に着けて、積極的に、前向きに生きていくことができる豊かさが生まれるという、畏れと、驚きと、喜びも示されています。

クリスマスメッセージが伝える恐れと驚き、そして喜びの一つは、わたしたちがどんな人も、どんなに罪深いと絶望している人であっても、どんなに自分はふさわしくないとと思っている人でも、誰でも、主イエスの恵みを受けられるということであり、つまり、ただ信ずるだけで、行いは必要ではなく、なんの条件も必要ない。必要なのは、信仰だけ、ただイエスを救い主であると信ずるだけでよい、信ずるだけで救われて、神の子になれば、尊厳さを身に帯びることができると理解し、信じ、経験できたということです。

クリスマスの出来事を証しするために登場し、選ばれ、必要とされ、用いられている人たちに、正統ではないと思われている異邦人の占星学者や、聖なることから遠いと思われている貧しい羊飼いたちがいます。彼らはどんなに感動し、喜び、感謝し、希望を持ち、自信をもつことができたことかと思えます。そう思うと同時に、何でなのか、どうして貧しく、ふさわしくないとされている人たちに、真っ先にクリスマスの大いなる喜びのメッセージが伝えられたのか、不思議に思われます。

それは、貧しい者を豊かにするためにやってこられた救い主の使命からすれば、自信を持ち、神なしでも生きていけると思い、特に誇り高ぶっている人は、クリスマスのメッセージを聞いても、少しも心を動かされず、ありがたくも思えないということかもしれません。

自分は神の憐れみがないと生きていけない、赦しを必要としている愚かな、貧しい、弱い人間であり、神の憐れみをただ信ずることでしか生きられないと思って、小さく、謙虚にさせられている人の心に、クリスマスのメッセージは、豊かに沁みわたっていくということが、証されているのかもしれない。

## 母との思い出

田代 俊治

今回の母の葬儀に際しまして、茶屋牧師さんをはじめ、皆様に大変お世話になって、大変感謝しております。母ぐらいの年になりますと、お友達も少なく、三十数年間、施設で療養していたので、付き合いも少なく、寂しい葬儀になるなと思っていましたが、教会の方が多く来てくれて賑やかになり、母も喜んでくれたと思います。

教会への始まりは、小学校一年生のクリスマスの時に、旧愛国保育園で、教会のクリスマスに、お菓子とミカンがもらえるので参加したのが初めてのようになります。その後も、母より教会に来るように言われていましたが、行ったり行かなかったりで、親孝行の子ではなかったと思います。母は戦前、今佐伯さんのおうちに教会があった処に、小さい頃より、教会に両親と行っていたのではないかと思います。

中学生になり、教会の牧師さんより英語を習っていた頃、牧師さんの奥さんから、日曜学校に出るように言われ、出ましたが、その後に、大人の礼拝にも出席するように言われ、残るのが嫌で、その時一緒にいた友達と、教会を逃げ出して、以降行かなくなったのも、思い出されます。母に迷惑をかけたものと思います。



1951年頃のクリスマス  
田代馨さんは、前方右

私が日本生命小豆島の支部長をしていた時に、高松での幼稚園の会議が終えた後に、母が小豆島によりました。島観光バスに孫と一緒に乗せたのが、大変なことになりました。バスに乗車中、四トン積のショベルカーが母の頭に直撃し、心肺停止後、十時間後に意識が回復しました。孫の長男は、幸い一週間で退院しました。

母は 三か月後退院して、何年か復職しました。二年後に、前頭葉を強打した後遺症から、てんかん症になり、強い薬を飲み続けて、認知症になりました。それからは、長い長い、特別養護老人ホーム生活が始まりました。老人ホームでは、皆によくしてもらい、葬儀には沢山の介護職員がきてくれました。

母と長年おつき合い頂き、ありがとうございました。天国で母は、感謝して、喜んでいると思います。

## 追悼：田代馨さん

松本京子

この夏、田代馨さんが召された。夜の12時の見回りでは変わりがなかったのに、次の2時の時には、もう息をしていなかったのだそうだ。8月18日の未明のことで、94歳の誕生日まで、あと数日だったという。

田代馨さんは、若松教会のオルガニストだった。日曜学校の賛美歌も、馨さんのオルガン伴奏で歌ったので、ご奉仕の期間は相当長かったと思う。息子の俊治さんとは、若松小学校で同じクラスだった。昔の小学校は、特別な行事がなくても、親がふらっと教室に現れる、遠足や修学旅行などにも、親や家族が同行するなど、今考えると、開かれていた場だった。馨さんも幼稚園勤務の帰りだったのだろう、午後からの教室によく来られ、ニコニコと授業を参観していた。とても人懐こい方だったので、担任の先生たちとも仲良くしていたし、歴代の牧師さんとも親しくしていたと思う。ある時、とてもプンプンしていて、戸畑の村上英一牧師と喧嘩した、と言われた。幼い時、きょうだい喧嘩を母からよく叱られていた私は、大人になれば、しなくなると思っていたので、大人も喧嘩するということを、比較的早いうちに知った。

馨さんは、小豆島で大怪我をされたが、劇的に回復されて元気になられた。その後、入院されてからは、小畑さんや川口さんたちと一緒にお見舞に行っていた母から、様子を聞いていた。2009年春に九州に戻ってきて、もみじ苑に初めて伺った時には、馨さんは、もう話すことも動くこともできない状態だった。

介護士の方が、「先生、体を変えましょうね」と声をかけ、優しく体位を変えていたのが印象的だった。1997年に、ここに移った頃には、車椅子で動き、お元気で、歌を歌ったり、ピアノを叩いたりしていたそうだ。当時、“主は来ませり”をよく一緒に歌ったことを覚えていますよ、と言われた。

部屋では、大抵賛美歌が流されていた。先生は、賛美歌がお好きだから、と言って。入所前に当人がしていたことを再現する一つが、CDで賛美歌を流すこと。もう一つは、幼稚園の先生だったから、「先生」と呼びかけるそうだ。病院は、体のケアをすところ、ここは、心のケアを心がけていますと言われたのが心に残った。

訪問の時には、クリスマス集、アベ・マリア、受難曲、グレゴリオ聖歌などのCDを持参した。新しい曲が流れ始めると、馨さんの表情が変わるように思えた。今年の復活祭と一緒に聴いたのは、中村証二さんの『君もそこにいたのか：オルガンで綴るキリストの生涯』だった。リードオルガンの調べに、耳をすまして聴き入っておられるように見えた。そして目尻からすーっと一筋流れるものがあった。



田代馨さんは、後方左

2017年の6月初旬に、俊治さんから、馨さんが危篤状態に陥ったと連絡があったこともあった。翌日行くと、馨さんの様子は、素人目には変わりがないように思えた。いつもと違っていたのは、ベッドの横のサイドテーブルに聖書が広げられていたことだ。介護士さんに尋ねると、「お世話に来た人が1章ずつ読んでいます」と言われた。

昔あるところで、伝道についての議論があったことを思い出す。宣教や伝道の名の下に行われた戦争や異民族支配、啓蒙という名の西洋文明の押し付け、野蛮な偏見に基づく現地文化の破壊などなど、歴史が語る負の部分。開拓伝道者の苦労を現実知っている人たちの反応は、また別だった。搾取や抑圧の意志の毛頭なかった人々による純粋に宗教的熱意による”いい”伝道もある……議論は平行線を辿るだけ。

馨さんの部屋では、いつも賛美歌が流れていたし、看取りの時には聖書の輪読もあった。話せず、歌うこともできなくても、馨さんは伝道している、と行く度に感じた。介護する方々の配慮によるものではあったが、お節介でも、押し付けでも、強制でもなく、馨さんの存在そのものが、伝道だった。

お見舞いしたのは、最晩年の10年足らずで、それも年に数度だったのに、他ではあまり見られないことを経験させてもらった馨さんに、心から感謝している。

## 若松教会

## 二階堂光子

田代 馨さんが長い闘病の末、八月神様のもとに召されました。九十三才でした。

息子さんが、昔のアルバムを見せて下さいました。写真を見ていると、とても懐かしく、昨日の様に思い出します。

馨さんは、牧野先生の時から、礼拝と教会学校の奏楽をなさっていました。保育士というお仕事もあって、私達子供達と良く遊んで下さいました。「光子ちゃんオルガン習わない？私、教えてあげる」、と何度となく言われましたが、その度、「いや！いい！」、私。あの時習っていれば、若松教会にヒンプレーヤーは必要なかったかも…です。

母に手を引かれ、若松教会に通い始めました。CSの礼拝、分級が終わると、前の公園、牧師館、会堂の二階と、我が家の庭の様に走り廻っていました。その頃は、子供が多く、遊び相手には事欠かなかったのです。

「沢山よい事をして、天国に預金しておきなさい。そうすれば、きっといい事があるからね」、「悪い事も、良い事も、神様は見ているヨ」、「礼拝中は、静かにしなさい」等々、良いにつけ、悪いにつけ、大人が一声掛けします。今考えると、「えっ！」と思う一言もありましたが…。こうやって、大人の礼拝が終わるのを待っているのです。

クリスマスには、子供の聖劇は勿論、壮年会、女性会は、面白い出し物を準備し、大人と子供のにぎやかで、楽しい合同クリスマス祝会が始まります。その時には、田代さんのオルガンが、大活躍です。

一年を通じてイースター、花の日、収穫祭、夏休みには脇田へ海水浴と、楽しい行事が次々とあり、どれも思い出です。

今、若松教会には子供が居ません、あの時は、『本当に良き時代』だったようです。



昭和20年代のクリスマス  
子供がたくさん…

「茶屋先生はお酒が大好きでねえ・・・」、「佐伯義人さんは、九十三才で、シニアカーに乗って礼拝にいらっしゃり、私達に力を下さってたの・・・」等々。

何十年後かに、今の若松教会を語る子供が来てくれる事を祈りつつ……。

少ない人数での礼拝ですが、田代馨さんはじめ、多くの諸先輩達の信仰を覚えて、共に礼拝を守り、祈り、分かち合い、終りの日まで、強い信仰を持ち続けたいと願っています。

## 平戸・生月1日バス旅行

二階堂裕

10月17日、10人乗りのワゴン車に8名乗車で、平戸・生月を巡ってきました。

今年7月、世界文化遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリスタン関連遺産」の一部ですが、研修の位置付けとして、この旅を計画しました。

朝早くの出発でしたが、皆元気で、茶屋先生からの提案で、各自の信仰歴(受洗、連れ合いとのなれそめ等)を話しながら移動しました。

最初に、平戸島で一番有名な平戸教会(聖フランシスコザビエル教会)を見学し、生月の博物館「島の館」で、潜伏キリスタンの実態を学ぶことが出来ました。

約300年もの長い間、禁教であったキリスト教(カトリック)が、民衆の中でしっかりと息づいて来た事に、深い感銘を受けました。

又、地域によって聖具の違いがある(確かに、その時代は、お互いの交流が取りづらかった)事も学びました(生月の潜伏キリスタンは、マリア観音を崇拝しなかった)。

山田教会(鉄川与助設計)を見学した後、生月島を一周し、平戸および田平にて買物をし、途中、古賀SAにて休息して、若松に戻りました。

最年長93歳の佐伯義人さんも、元気に1日を過ごされ、安心しました。

朝食として、稲荷寿司を差し入れてくださった佐伯恵美子さん。結局、昼食となってしまいましたが、ありがとうございました(費用が軽減できました)。

少ない人数ではありましたが、皆で楽しい1日を過ごす事が出来ました。

反省点として、計画時間に多少甘さがあり、平戸まで時間がかかってしまった事、帰りはレンタカー返却の時間に追われて一寸飛ばしすぎた事があります。

次回(次年度計画するとき)は、この反省を踏まえて計画したいと思います。



平戸ザビエル記念教会



島の館の前で

## 2018年度 教会の歩みと予定

- 4月 イースター  
教会定期総会
- 5月 九州教区総会  
創立記念日礼拝  
ペンテコステ合同礼拝(於:若松教会)
- 7月 地区交換講壇
- 8月 平和の集い
- 10月 一日旅行(平戸・生月方面)
- 11月 逝去者記念礼拝  
もなかバザー
- 12月 クリスマス諸行事
- 1月 新年礼拝(於:若松浜町教会)  
地区信徒研修会
- 2月 信教の自由を守る平和集会
- 3月 地区総会

### 毎月の集会

- ・ 聖書研究祈祷会 (毎週水曜日)
- ・ あも～るの会 (第3日曜日礼拝後)
- ・ 生と死を考える会 (休会中)
- ・ 若松キリスト教連合祈祷会(毎月)

### 編集後記

筒井隆夫

今回は、田代馨さんの追悼号の色合いになりました。私が高校生の頃、列車通学のため若松駅に向かってる途中、田代馨さんと出会い、幼稚園の帰りとの話をした記憶があります。以前より、田代馨さんは、オルガンの奉仕をされており、事故に合われた後も、ゆっくりとしたタッチでしたが、懸命に奏楽されていました。その頃、戦時中のことで、建物疎開のため、土井町の教会が倒された時は、とても悲しかったと聞かされました。施設に入られた後、職員の方と一緒に、車いすで、礼拝に出られたことがありますが、教会でお会いしたのは、それが最後になりました。



2018年8月平和の集い



2018年8月オルガンコンサート(中村証二さん)



2018年8月被爆者の証言(吉崎幸恵さん)